

全国てんかんセンター協議会総会静岡大会2014

～抗てんかん薬による薬疹～

HLA-A*3101陰性だけでは否定できない

抗てんかん薬カルバマゼピン(CBZ)による薬疹の発症にはHLA-A*3101遺伝子型が関与することが知られている。奈良医療センター薬剤科の平山真秀氏は、てんかん患者78例のうち、5例でCBZ投与による薬疹を疑う皮膚障害が認められたが、この発症例全例ともHLA-A*3101遺伝子型が陰性であったと報告し、「抗てんかん薬による薬疹発症リスクを下げるためHLA-A*3101遺伝子型を確認することは効果的であるが、陰性であっても薬疹が発症しないことを決定付けるものではない」と述べた。

アレルギー歴、副作用歴とも 関連せず

平山氏らは、GENCAT study*に参加した自施設てんかん患者のうち78例(男性47例、女性31例、年齢中央値38.5±0.37歳)を対象に、同study調査期間中における薬疹の発症状況などを検討した。なお、78例中64例(82.1%)はHLA-A*3101遺伝子型が陰性であった。HLA-A*3101陰性例にはCBZを、同陽性例には代替薬をそれぞれ投与した。

その結果、5例(6.6%)で薬疹を疑う皮膚障害が認められたが、全例と

もHLA-A*3101遺伝子型が陰性であった。薬疹を発症した5例についてアレルギー歴を検討したところ、薬物性アレルギー歴ありは1例、薬物以外のアレルギー歴ありが1例(原因物質不明)であった。また、78例の副作用歴を検討したところ、副作用歴ありは11例(14%;抗てんかん薬3例、抗菌薬2例、その他2例、不明4例、重複あり)であったが、薬疹を疑う皮膚障害の発症例では抗てんかん薬の副作用歴あり1例、抗菌薬の副作用歴あり1例であった。以上の成績から、抗てんかん薬服用患者における薬疹発症と、アレルギー歴および副作用歴との関連は認められなかった。

今回の検討成績を踏まえて、同氏は「過去に抗てんかん薬による薬疹の発症歴を有する患者に新たに他の抗てんかん薬を投与する際には、慎重に経過観察する必要がある。遺伝子型に基づくオーダーメイド治療の有効性を評価するためには、今後も遺伝子検索を重ねていく必要がある」と述べた。

*理化学研究所統合生命医科学研究センターを中心に実施しているGENCAT理化学研究所遺伝子型に基づくCBZのオーダーメイド投薬の検証に関する前向き研究